



～甲斐武田発祥の社～ 武田八幡宮

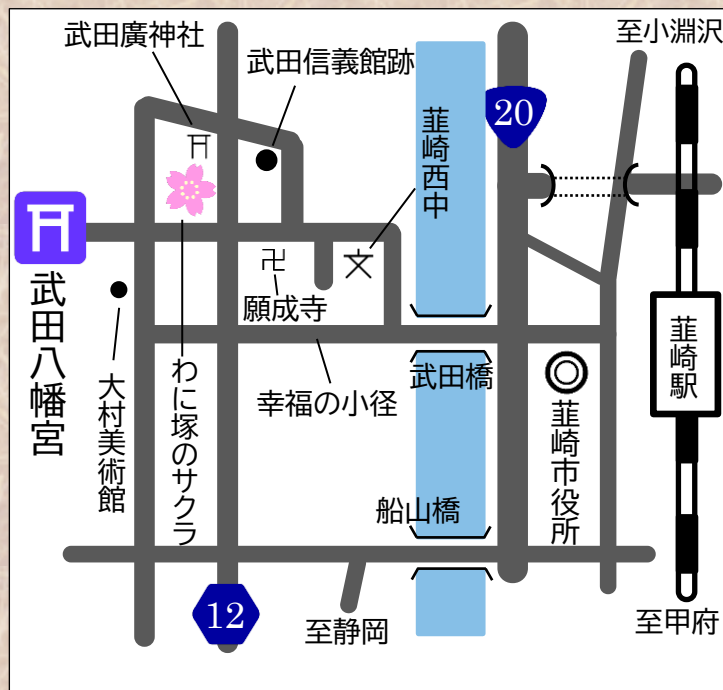


〒407-0042

山梨県韮崎市神山町北宮地 1185

<https://www.takedahachimanguu.com>

交通アクセス



【JR 韮崎駅から】

韮崎駅前ロータリーから韮崎市民バス円野線に
乗車/バス停「武田八幡入口」下車/徒歩約5分

【中央自動車道韮崎 IC から】

韮崎 IC から車で約 15 分(約6km)

—御祈願のご案内—

武田八幡宮では、初宮参り/七五三/地鎮祭/家清祓い/竣工祭/諸祈願等、祈願を受け付けています。武田八幡宮社務所までお問い合わせください。

TEL 0551-33-9370

受付時間 10:00~16:00(火・木除く)

メール takedahachiman@gmail.com

御祭神

たけだたけのおおかみ やまとたけるのみこと
武田武大神…日本武尊の御子

たらしなかつひのみこと ちゅうあいてんのう
足仲津彦命 (仲哀天皇)

…武の神

おきながたらしひめのみこと じんぐうこうごう
息長足姫命 (神功皇后)

…安産の神

ほんだわけのみこと おうじんてんのう
誉田別命 (応神天皇)

…文武の神

御由緒

伝えによれば今からおよそ1200年前、弘法大師がこの地へ来られた時、山を背にした中空へ八幡神(八幡大菩薩)が現われ、「我をこの地に祀ったならば国家は安泰であろう」とお告げがありました。よって弘法大師は京へ帰り天皇に申し上げますと、弘仁13年(822年)嵯峨天皇の勅命により、武田武大神(日本武尊の御子)を祀る社を桜の御所から現在の地に遷宮し、九州の宇佐神宮(八幡総本宮)を勧請して合祀し創建されたのが起りといわれています。その後、貞観年間(859~876年)には京都石清水八幡宮の御霊を社中に勧請しています。甲斐源氏の流れをくむ、新羅三郎義光のひ孫、龍光丸は13才の保延6年(1140年)武田八幡宮の神前で元服して武田太郎信義と名乗りました。これが名門甲斐武田氏の発祥です。信義公は広大な館を構えるとともに、武田八幡宮の本社・末社など御建造され武田家の氏神として尊崇しました。

本殿

本殿は、武田信義公から400年後の天文10年(1541年)武田信虎公・信玄公により再建されたものです。本殿の特徴は、三つの扉があり大きな屋根が正面に流れている三間社流造檜皮葺という建築様式です。武田氏の強大さを誇る造りです。その後の修復は、徳川家甲府藩主の柳沢吉保が神社に関わっていることも確認されています。昭和4年本殿が国宝(のち重要文化財)に指定されました。令和元年には40年ぶりの屋根葺き替えを行いました。



摂社:若宮八幡宮

魔除けの鬼

勝頼夫人願文

武田勝頼公は、天文9年(1581年)12月24日新府城に入城しました。すでに形勢が悪く、織田信長に攻め立てられました。夫人は武田家の守護神である「武田八幡宮」に祈願を決意し天文10年(1582年)2月19日「祈願文」を納めました。しかしながら願い届かず勝頼公一行は3月3日に新府城を後にし岩殿城へ向かいました。そこで小山田氏の裏切りにあい田野で悲しい最後を迎えました(3月11日)。時に夫人は19才、勝頼公は37才。

二ノ鳥居(両部鳥居)

武田信虎公・信玄公によって再建されたものです。武田家滅亡後の天正12年(1584年)徳川家康が新府城在陣の折に社領を従来通り維持管理することを認められ、修復しています。額束の裏面には元禄14年(1701年)再興、寛政元年(1789年)再々興とあることから現存しているものは320年余の歳月が経っていると思われます。高さ7m、笠木の長さ9.8m中央部に『武田八幡宮』と書かれた額が掲げられていますが、これは信玄公が書いたものだといわれています。『武』の字が一画多いのは刀を抜かないと決意した公の心情を表しているといわれています。文字が風化して今でははっきりしていません。



額束(がくづか)

武田八幡宮

三ノ鳥居(明神鳥居)と石垣

石垣の上に立つ石鳥居と正面参道側の石垣と石段、随神門前の石積みは神社の境内の入口にあたる社頭の部分の形態としては、他に例のない珍しいものだといわれています。石垣と石鳥居の配置に特別な関係があるようです。この特色ある状態を保存する為に、正面の長さ6.03m、高さ1.67m程の石垣とその上に立つ鳥居が県の文化財として指定を受けました。

摂社・若宮八幡宮

承久2年(1220年)武田信義公の弟である加賀美次郎遠光によって建立されたものです。祭神は、大鷲鷲尊(応神天皇の御子・仁徳天皇)が祀られています。

末社・為朝神社

鎮西八郎源為朝公を祀った神社です。為朝公死後、身内である信義公によって建立されたものです。為朝公は古今未曾有の強弓の武人といわれていて、保元の乱(1156年)には父に従って奮戦したが敗れて捕らえられ伊豆大島に流されました。ある時一人の老翁が筵に乗って流れ着き、「我は疱瘡の神で、先ごろ京都で疱瘡を流行らせこの島に流れてきた」という。これを聞いた為朝は声を荒らげて「我この島にありて万民を撫育し国家安全を守っている、汝早く去るべし」と、弓矢を向けると、老翁その弓勢に恐れて低頭再拜して退散した。その後大島で疱瘡は発生しなかったという。そのため為朝神社が疱瘡の神として信仰されるようになりました。徳川家康公ご入国の際も参拝し、「武運長久・疱瘡麻疹安穩」を祈ったといわれています。為朝神社は、病魔退散、厄神除け、子供の健やかな成長を祈願する神社です。

